

「生死の境」

口之津病院 川野正七
(元脳外科助教授)



ご紹介いただきました川野でございます。名前は正七、大正7年生まれで七男坊でございます。女の姉妹はひとりもいません。男の七番目でございます。来年の1月4日で満の88歳です。生まれてきた時に、うちの母は「生まれてこんでもよかると」と言うたそうです。というのは、上に6人男の子がいましたから、今度こそ女の子と願ったのです。当時、まだ出産前は性別が分からなかったのです。生まれてきたらよけいなものまでついて、がっかりし、「生まれてこんでもよかると」と言うたそうです。だから、名前付ける気もしなかったのでしょう。それで大正7年生まれだから、正七と名づけたので、いわばよけいな者として生まれてきた人間でございます。それが、今日まで生き長らえてきて、満88歳にやがてなろうとしているんですけど、不思議な運命だと思っております。

今日のお話を頼まれて、やっぱりためらうのは、みなさんもすでにご存知のように、60年前に大学が原爆にあって壊滅したとき、学生の中で、当時の3年生が一番死人は少なかったのです。今日もこの場所に来て思い出すのですけども、以前この近くには解剖教室がございました。それから1学年、2学年のための教室があって、そこで授業を受けていた人が全滅したわけです。生き残りはひとりもないのです。それなのに、私は3年生で外来にいたのです。外来の建物はちょうど原爆の反対の方向ですから、大学の中でも被曝量が少なかったのです。正確な被曝量は知りませんが、助かった人が多かったのは外来の建物の中だった

からです。

私は実は今日のお話は、引き受けたくないと思っていました。亡くなった学生達に、ほんとに気の毒だと思うのです。みなさんご存知のように、当時、長崎大学で死亡したのは893名ですか、いやいや850名ほど。大学で。正確な数は知りませんが、880、893名くらい。1年生が73人ほとんど全滅です。1年生と2年生の基礎の授業は、この近くで行われておった。浦上天主堂が見えるくらいですから、そこでひとりも助からなかったんです。たまたまその日欠席した人が、生き残っただけです。4年生は、3年生以上にたくさん亡くなっているのです。理由はよく分かりません。3年生が一番少なくて、3分の1以下です。その1人で生き残っているのが、なんか申し訳ない気持ちになります。毎年慰霊祭には出て参りますけども、遺族の方々に顔を合わせると、いつもすまないという気持ちでいるわけなんです。しかし、どうして私が助かったのか、一応本に書きましたので、口で申し上げるより、そこを読んでみようかと思えます。

昭和20年の8月9日の朝、私が学部3年生の時です。入学したのは昭和18年ですね、兵隊から帰って来てからです。私の高等学校は佐賀高等学校の文系でしたから、あんまり数学は駄目だったんです。それでもシュバイツァー博士を尊敬していたから、医者になりたいと思ったけども、とても駄目だと諦めていたのです。ところが、私がいた満州の軍隊に長崎大学出身の軍医さんがいて、受験資格に必要な勉強を教えてくれたのです。資料

をもらって勉強しました。帰って来たのは、昭和18年の3月の終わりです。その2ヶ月前に母が亡くなって、親父が1人でしょんぼりしてた時に帰って、すぐに永井先生のところに行って、胸部の写真を撮ってもらったのです。なぜかという、私は以前、同志社大学にいたのですけれども、胸を悪くして退学したんです。そしたら兵隊にとられて、3年間満州にいたのですけれども、不思議なことに、兵隊にいるときには、写真も撮られないし、検査もされなかったの、いつのまにか元気になる、帰って来たのです。永井先生にレントゲン写真を撮ってもらったら、やっぱり再発した痕があったので、危なかったのですけれども、コウリャン飯を食べながら、生き延びて生きたらしい。それで4月に帰ってからすぐに、レントゲン写真を撮ってもらって、その永井先生が一応仮入学を認めるといことで、8月でしたか、入学したのです。昭和18年の新入生ですから、昭和20年には、2年の終わりの筈なのですけれども、夏休み返上だったので、原爆がおちたときには、3年生になって、授業を受けていたわけです。その間の経緯は、詳しく話す必要はないと思います。

8月9日の朝は、当時の学長の内科講義があったのです。それが終わったのが10時半頃で、それから11時から、3年生は外科の外来に行くことになっていました。外来実習の時間です。けども朝から空襲警報が鳴ったりして、患者さんは1人も来ていないのです。予診をとろうと思って行ったけれども、予診する相手がいなくてぶらぶらしていました。ちらっと外来の診察室を見ると、すでに古屋野先生が来ておられました。当時は外科部長でした。それで私はそっちの方に行ったのです。予診室に残っていた友人は、何人か原爆で死んだのですけれども、私は外来診察室にいたおかげで、死なずにすんだのです。そのところはこの本に書きましたので、そこを少し読まさせていただきます。



11時少し前に、古屋野教授が診察室に入られたのを知って、私と佐々木君は急いで診察室に入った。教授はすでに、待っていた患者の診察を始めていた。記録係の医局員がまだ来ていないので、私が教授の後ろに近づいて、カルテに記入しようとして教授の言葉に聞き耳を立てた。

その瞬間である。数千のマグネシウムを一度にたいたい目くらむ閃光が部屋中を満たした。すわ空襲、と本能的に床に臥せようとしたが間に合わなかった。窓からの爆風に私の身体は吹き飛ばされた。

床の上のにめりそうになるのを、辛うじて手と膝で支えたが、何も見えない。部屋中にキナ臭い煙が充満して息もつけない。私は息をとめて眼を閉じた。かねて覚悟はしていたが、いよいよ最後の時が来たか。走馬燈のように過去の記憶の断片が頭の中をよぎる。今日まで生きて来られただけでも運がよかった。私の一生がこれで終わりなら、それでもよい。すべては神様の計らいであろう。死も死の後もお任せするだけである。

「これまでの恩寵の導きを感謝いたします。私の魂をいま受け入れて下さい」

と祈った。心に平安が満ち、悲哀も恨みも不安もない。

もうこれ以上息をとめて居ることが出来ない。この煙の中でいよいよ窒息か、と思いながらそっと息をした。呼吸ができる！もう一呼吸、何ともない。生きているのである！振り向いて見ると、煙の渦の中に微かに明るい所が見えて来た。その

方向に歩いて行くと窓がある。窓ガラスは壊れてしまっていて、一部に破片が残っているだけである。急いで窓に登り、下を覗いた。

窓の下に見えるのは地面ではない。地下室の出口に続くコンクリートの路である。眼のくらみそうな高さである。無事に着地出来る自信はない。しかし、よく見ると、地上からその地下道に通じる階段があって、その途中に向きを変える踊り場がある。「あそこだ！」と思って、その踊り場めがけて跳び降りた。運よくその踊り場に転倒しないで足が着いた。急いで階段を登りつめて地上に出た。

私の眼の前に展開されたのは異様な世界である。真昼というのに、見渡す限り黄褐色の霧に覆われた黄昏の世界である。ダンテの地獄に迷いこんだのであろうか。陽の光の届かない深い煙の霧の中を亡霊たちが歩いている。真黒にすすけた顔に見開いた眼と歯だけを白く残して、表情もなく、声もなく、夢遊病者のように歩いている。気が動転して、無意識に救いを求めているのであろう。身に着けている服は裂け、半裸に近い姿である。それも1人や2人ではない。人影は次第に増えてくるが、声もない、死んだような世界である。皆、黙々と病院の裏門に向っている。表の方は煙に包まれている。大学の坂下の町並みは既に火の海となり、津波のようなどよめきが聞こえる。火に追われて助けを求める無数の人の声が重なり合って聞こえてくるのである。

少し行くと足元で救いを求める弱々しい声がする。看護婦である。その白衣は痛ましくも焦げて裂け、皮膚は黒褐色によごれ、此処かしこ血に染み、毛髪も焦げ縮れている。顔をそむけたくなるような白衣の天使の変わり様である。急いで助け起こし、肩に背負って歩き出す。裏門に近づくと斜め向こうの基礎教室の方角に巨大な火の柱が立ち上っている。基礎教室の木造の建物が火を吹いているのであろう。あの中に1、2年の学生が全員、生きながらにして焼かれていると思ったときの衝撃！

その方向から響いてくる阿鼻叫喚の大合唱を逃

げるように、急いで病院の裏門を通り抜けると、裏山に向かって遁れ行く人々の群に加わった。私の重荷を見かねて、他の学生が代わって傷ついた看護婦を引き受けてくれたので、私は身軽になり、火と煙に追われながら、山の方に遁れて行った。

長くなるので、ここらあたりまでにしますけれども、要するに、火の盛りを避けて逃げるようにして山に登って、そして途中で倒れている子供や、死にかかっている人達の姿を、見たり慰めたり励ましたりしながら、1人子供を、母親から「助けてくれ！」って大きな声で、「子供を助けてください。子供をお願いします！」という叫び声が聞こえるので、その子供を抱えて、そして山の方に登って行ったのです。

これ以上私は読む元気がありません。要するに、どうして山の方に行ったかという、もう病院は炎に包まれて、煙に包まれてとても行けないので、煙のない山の方にかけて行ったのです。もう一つの目的は浦上第一病院、今のフランシスコ病院です。あそこに秋月先生がおられるのを知っていたので、その病院がどうなっているのか気になったので、その方向を探して、3時間くらいかかって、やっと浦上第一病院に辿り着いたのです。みんな焼け野原ですけど、たった1箇所だけ、3階建ての赤レンガが、黒焦げになって建っていたのです。やっと病院を見つけて行ったのですが、秋月先生も疲れきっていたし、看護婦さんも怪我をしたり、女医さんも動けなくなったりというなかに、やっと私が辿り着いたので、何とかお手伝いをしようと思って。そのときには周囲からこのあたりで見える建物といたら、焼け残っているのは、浦上第一病院だけぐらいでしたから。次々患者さんが辿り着いて来るので、秋月先生1人では到底処置できないので、私が手伝いました。

それからの生活のことは、詳しく書いていますが、非常に辛かったのは、食料を取りに遠くへ出かけて行ったとき、その途中の焼け野が原に、泣いたり、叫んだり、うめいたりしている人々がいて、それを助け起こそうにも、どうしていいか分からないし、せめて「水、水」と言う人

達に、水を汲んで来て、すくって1人1人飲ませてあげることが、1人でできる精一杯のことでした。そんな生活をして、やっと医療品や食料を遠くから手に入れて戻って、大学病院に辿り着いた時に、古屋野学長が、(当時は学長ではありませんでしたが)「いよいよ日本は戦争に負けたんだ」と言われたので、終戦の通知があったということを知ったのです。胸がいっぱいになりました。



大変参考になったのは、この小路先生が書かれた『長崎医科大学壊滅の日』という本です。なぜ助かったかという、地図が書いてありますように、原爆がこっちからあって、病院の外来はここにあったんです。一番反対の所に、外科の診察室があって、そこにたまたま居たものだから、助かったのです。しかしながら、病院全体から言えば、893人が亡くなりました。そのうち学生が、1年生が73人、2年生が63人、4年生が36人と、たくさんの方が亡くなったんですけれども。3年生は、数が少なくて犠牲者が15人に終わったというのは、さっき言ったように、たまたま外科の外来の時間であったために、古屋野先生と一緒に原爆直死を免れた、そういう幸運があったのです。同級生の片山とかいう優秀な友人もいたのですけれども、りっぱな同級生が次々と亡くなりました。1年生、2年生の中にも、私の知っている人も中にはいたのですけれども、1人も助からなかったのに、私が生き残って悪いなあという気持ちがあります。

ご承知のように、大学は廃校になるはずだった

のです。それをなんとか長崎大学を残そうということで、古屋野先生その他が、一生懸命努力しました。私も東京まで行って、文部大臣に陳情して、是非大学をまた再建さしてくれるようにと頼んだのです。新興善小学校、その他、今の国立病院のある大村の海軍病院などを、1、2の病院診療所として使いながら、長崎大学は何とか医科大学として残ることになりました。その経緯はすべてこの本に書きましたので、余裕のある方に読んでもらえばいいと思います。

そういうことで、助かったのですけれども、いつも私の中には、やましさがあります。たくさんの方が、それこそ900人近く、看護婦も殆ど全員です、事務の職員だとか、教授も10人くらいですか、亡くなったのに、私は生きていて、申し訳ないという気持ちがいつもありました。しかし、なんとか長崎大学が今日まで残ったのですから、やっぱり長崎医科大学を、大事に、私達は守っていかなければならないですし、亡くなった医学生達に分まで、いい仕事をしなければならぬという、そういう責任感をいつも感じておりました。

ご承知のように、私が卒業したのは昭和22年ですけれども、その頃は、肺結核が多い時期でしたから。その肺結核の病巣を切り取る手術を、ガリオア学生として修学に行って、オレゴンとミネソタの病院で研修して帰って来てから、第2外科でそういう手術を始めることができたのです。その後、自動車がが増えて交通事故が増え、頭部外傷が増えて、それに対する頭部の専門家がいなかったということ、また、長崎大学は福岡大学に劣ると感じたので、また、1958年からオレゴン大学に行って脳外科の研修を受けました。研修医がたった1人しかいない、新しくできたばかりの脳外科教室で、わずかの間に400例ほどの手術をして、夜も寝る間がないくらいで、教授1名、レジデント1名という生活を。さんざん苦勞したおかげで、なんとか脳外科の手術ができるようになったので、長崎に帰って来て、第2外科で脳外科を始めたのです。初めは一緒に仕事をしてくれる人は、ほんの僅かでしたけれども、ご承知のようにその後、脳外科

の講座ができました。そのときはすでに私は50才の半ばになってまして、若い脳外科医が京大から来られて、教授になったので、私はもう辞めようと思っていたのです。そのときに佐世保の労災病院に行くように言われたので、労災病院に2年ほど行って、そこで脳外科関係の仕事をしておりました。

2年後に今度は、八幡の北九州市立の八幡病院の院長にならないかと勧められました。潰れかかった病院で、それこそ、もうみすぼらしい病院で、北九州市は潰そうと思っていた病院なのですけれども。そこに行かないかという話があって、それで行ったのです。みなさんに助けていただいて、その後、10年近く、八幡病院の院長を勤めました。おかげさまで、最初はまだぼろぼろで、くずれかかって廃院になるべきところの病院が、10年後にはりっぱな病院に蘇りました。最初は赤字で困っておったのが、ちゃんと北九州市内でも、患者の一番多い病院に成長しました。それだけのことをして、その後帰れたのは大変よかったですと思います。それにもまして嬉しかったのは、長崎大学の後輩のいろいろな科の人達がたくさん、内科はもちろん、第2外科からも来て手伝ってくれて、長崎大学が大いに活躍してくれたので、私も誇り高く感じました。

いろいろございましたけども、その中で良かったなあと思うのは、北九州市に日本で何番目かの『いのちの電話』を始めるのに、協力を求められました。自殺しかけている人達は相談する相手が欲しかったのです。そういうので『北九州市いのちの電話』の創設に関与できました。おかげで何百人という人が、その電話相談で、助言を聞き、話を聞いてくれる人がいるので、自殺を思いとどまったということがたくさんあります。医学的な関係のは私が受け取ってやっておりましたけども。もうそれから30年近く続いて、長崎にもできましたけど、北九州ではなかなかいい仕事をしたなどと感謝しております。

もうひとつはみなさんご存知のように、私が脳外科の手術をして、たまたま姪の脊髄の手術をす

るようになるとは思ってもみなかったです。姪が「足が痛い」と言って調べたら、何と脊髄を椎間板ヘルニアが圧迫して、痛みがあった。それを除くために脊髄の手術をしました。なぜ若い姪がそんなところに病気ができたかということ、それは学生時代からタバコをのみ始めたからなのです。というのも、親がタバコを吸ってたんですね。その他にもタバコを吸う兄貴が、やっぱり癌で亡くなりました。タバコを吸ってて癌で亡くなった兄が2・3名おります。その娘の1人がやっぱり親の真似をして、タバコを吸い出して、癌になりました。もちろん肺癌で死にました。ところが兄貴と娘が死んだ後、今度は兄貴の嫁がやっぱり肺癌になって、手術しましたが、あえなく亡くなりました。というのも、みんなタバコを吸っていたのです。特に姪は、高校時代から親の真似をして得意になって、女の子なのにタバコを吸っていた。それが肺癌になって、そしてそれが脊髄に転移して、苦しみ亡くなったということです。それで私は、タバコの怖さを初めて自覚するようになったのです。

たまたまその頃、全国で禁煙運動が始まっておりましたので、私もその1人として、時には日本の全国の禁煙協会の会長をさせられたりしましたけれども、日本だけではなくて外国にも行って、禁煙会議に出てきました。まあ、そのためか、北九州では喫煙率がどんどん下がって行って、市は困っちゃったのです。タバコ税の収入が減っちゃったのです。それでそれは困ると言われたので、「じゃあ、私が辞めます」と言って、私が辞職しましたけれども。その後も北九州では癌の発生率が、よそよりも少ないのです。それはみなタバコを我慢するようになったからです。今は有り難いことに、世界中で禁煙の結果が現れておまして、癌の心配が段々少なくなってきました。そういうことで禁煙運動とそれから『いのちの電話』と、その他に北九州で救急医療のトップを飾るようになり、毎週のように脳外科の夜勤を手伝ったりしました。そういうことがあって、お役に立てたということを喜んでいきます。せめて亡くなった友達

の分まで働きたいという気持ちは今も変わりません。

肩書きにありますように、明日も口之津病院に参ります。リハビリのお手伝いです。もう手術はしていません。それから木曜日には、有喜に重症心身障害者センターがございます。まあ皮肉なことに、その中には美和子という名前の、私の家内と同じ名前の生まれつきの障害者がいます。毎週私は行っております。その他に金曜日には、諫早に恵仁荘という老人ホームが出来まして、その田園診療所の仕事をやっています。月曜日だけは勤務がないです。実は、さっきまで県立の体育館で卓球をしてまいりました。毎週月曜日は卓球デイなのです。そういうことで、へとへとになっています。でもおかげで、元気で米寿を迎えられるということは、有り難く、それだけにまた、亡くなった同級生や下級生達にすまないという気持ちがいっぱいございます。

みなさんもどうぞ生きているだけでも、有り難いということを感じて、できるだけ自分のことよりも、みんなの苦しみや悲しみを慰め、助けてあげることができる、そういう医療、その他の仕事を続けていただきたいと思います。大変長くなりましたけれども、以上で私の話を終わります。話が予定の半分も出来ませんでしたけれども、この本を置いていきますので、お暇があったらこの本を読んでいただくと、原爆・被爆の状況はよく分かると思いますし、その後の、日本の禁煙運動のこともわかると思います。大変長くなってしまいましたが、ご静聴有り難うございました。

参考文献

- 川野正七著：雲と光 或る脳神経外科医の軌跡
三月書房、1988年
小路敏彦著：長崎医科大学壊滅の日
丸ノ内出版、1995年

川野正七氏 プロフィール

- 1918年（大正7年）1月4日生まれ 87歳 長崎県出身
- 1947年（昭和22年） 長崎医科大学卒業
- 1951年（昭和26年）～1953年（昭和28年）
ミシガン大学及びミネソタ州立病院留学
- 1954年（昭和29年） 長崎大学医学部附属病院第二外科講師
- 1959年（昭和34年）～1961年（昭和36年）
オレゴン大学脳神経外科留学
- 1960年（昭和35年） 長崎大学医学部附属病院第二外科助教授
（後に脳神経外科助教授）
- 1974年（昭和49年） 長崎労災病院医長
- 1976年（昭和51年） 北九州市立八幡病院院長
- 1986年（昭和61年） 諫早市宮崎病院理事長
- 1997年（平成9年）～現在 口之津病院非常勤医師

【出版物】

- 『雲と光 或る脳神経外科医の軌跡』“*The Cloud and the Light*”
『愛の摂理』『ひとり旅』『白髪の天使』『原爆と聖書』
『恐るべきタバコ』